

棹

太



第  
百  
一  
號

行發社棹太京東

チカラミ に 腸胃

候 仕 轉 移 へ 記 左 臘 舊

東京市日本橋區濱町二ノ十  
新潮製藥株式會社  
電話字通町三八一三番  
振替東京七〇一〇八番

幸 松

すき 焼

和洋御料理

淺草公園 (千束二ノ三四)

牛 鍋 本 店

電話根岸 (87) 〇三八〇番  
二〇〇〇番

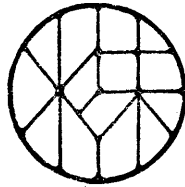
風 流 ・ 金 ぶ ら ・ 茶 漬

【美地旬】

去 月 屋

新橋二ノ八  
電 銀 二〇八

謹 賀 新 年



兜

事 務 所

會

日本橋區兜町一丁目四番地  
鈴木甚四郎方  
電話茅場町三三五五六六番

謹 賀 新 年

安藤どくる

謹 賀 新 年

武  
笠  
宏  
亮

橫  
井  
三  
由

年 新 賀 謹

小

林

和

舟

井

上

巽

謹 賀 新 年

---

鈴  
木  
松  
寶

喪中に付年始の御挨拶御遠慮申上候

近江清華



謹 賀 新 年

東都五十義會

事務所

京橋區木挽町四ノ二(吉田方)  
電話 京橋一〇〇六〇〇四番

淨曲 無名會

事務所

神田區花房町三(河野方)  
電話 下谷五四〇〇番

謹 賀 新 年

# 巴 津 天 會

會 長

寶藏寺天昇

相談役 宮 島 和 紅

常務理事 武 藤 壽 昇

事務長 長 谷 川 勇 昇

顧 問

竹本巴津昇

事務所

杉並區和田本町九五  
一竹本巴津昇方  
電話中野五七九三番

年 新 賀 謹

會 秀 綾

竹	山	南	嵐	藤	島	石	大	酒	笹
本	田	條		原	田	塚	谷	井	本
綾	壽	壽	司	綾	綾	歌	大	龍	竹
秀	瓢	光	光	路	登	吉	瓢	司	始

(イロハ順)

會 見 朝

竹	平	島	山	青	松	白	野
本	井	倉	崎	島	岡	井	中
朝	壽	松	昇	廣	波	井	一
見	樂	香	朝	昇	朝	孝	竹
太							
夫							

(イロハ順)

謹 賀 新 年

---

細  
川  
清

本所區東兩國二丁目四  
電話本所〇八一八番

年 新 賀 謹

香 伯 會

鶴	鈴	塚	鈴	大	岩	吉	橋	堂	九	栗
澤	木	口	木	谷	田	田	本	野	里	原
觀						美		前		
西		清	松	紫	末	地	掬	鐵	香	千
翁	雀	雀	寶	道	成	句	月	幹	候	鶴

(イロハ順)

謹 賀 新 年

中  
澤  
巴

坂  
倉  
素  
遊

謹 賀 新 年

---

長 谷 川 文 久

星 野 桔 梗

吉 田 三 芳

安 藤 光 樂

年 新 賀 謹

金  
田  
金  
鳳

白  
井  
清  
華



謹 賀 新 年

大用大嘉津

福田柳蝶

及川旭

丸都改

國井やまと



謹 賀 新 年

鈴木和樂

巴雪會

阿部一

高橋可遊

野口みなと

謹 賀 新 年

岩 木 義 雀

平 井 榮

乃 村 乃 菊

小 埜 長 と ろ

謹 賀 新 年

芳 聲 會

一 辰 里 千 清

重 壽 芳 壺 芳

豐澤芳太郎

(イロハ順)

義 松 會

疋田大龍

田中司若

三口松藤

豐澤松造

豐澤松四郎

謹 賀 新 年

高 瀬 操

湯 原 清 司

錦 錦 松

廣 瀬 いろは

年 新 賀 謹

大  
築  
葵

川  
奈  
部  
銀  
司

菊  
池  
秋  
月

吉  
川  
浪  
補

年 新 賀 謹

# 野澤糸造連

(順ハロイ)

糸春芳登童可長文小  
喜

子和田盛雀松門盛久

天三三錦上久盛鈴野  
 よ  
 賞し枝司誠榮鶴仲  
 野澤糸造



謹 賀 新 年

小 川  
小 川  
都 都  
川 山

聯合  
素玄

淨曲研究會

岡田蝶花形

齋  
藤  
山  
生

金  
井  
辰  
稻

謹 賀 新 年

田 口 司 重

松 岡 茂 里 雄

原 田 越 巴

淺 田 奇 聲

謹 賀 新 年

手塚てつか

岡田源

若 手 會

(順 ハ ロ イ)

竹	野	豊	素	湯	川	野	岡	安	山
本	澤	竹	澤	淺	口	田	本	藤	田
都	和	和	力	光	子	高	柳	都	呂
太	造	孝	彌	玉	太	尾	光	昇	聲
夫					郎				

年 新 賀 謹

銀座義榮會

三福會

竹	稻	佐	浮	高
本	葉	久	谷	野
		間	祖	清
三	福	福		
福	代	司	樂	遊

謹 賀 新 年

橫濱

鈴

木

雀

製土建築

力供

材木築送給

本部  
下關市

業

籠

寅

商

店

出張所

東京・横濱・名古屋・京都・大阪  
神戶・廣島・小野田・門司・戸畑

保良鈴鳳

運送部(代表)長四一一番  
建築部(代表)一四七六番  
電話 一七一二番  
製函部(代表)〇七一七番  
演藝部(代表)二四六六番  
電話 二一九〇番・二八四八番

謹 賀 新 年

京濱素義聯盟會長

國 友 東 光

水 戶 部 壽

東京人形淨瑠璃  
藝術復興會

南 北 座

東京市目黒區中目黒  
四丁目一四七五番地  
電話大崎三八二九番

謹 賀 新 年

柳 有 明

柴 野 筑 波

黑 川 叶

事 務 所

新 義 座

座 員 一 同

關 東 事 務 所

志 屋

東 京 市 芝 區 新 橋 二 ノ 八

電 話 銀 座 二 〇 八

中 央 事 務 所

吉 岡 樓

大 垣 市 城 畔

電 話 一 〇 八 一 七 九

關 西 事 務 所

千 代 本

大 阪 市 北 區 曾 根 崎 新 地  
三 ノ 一 五 ノ 一

電 話 (北) 一 三 五 八

謹 賀 新 年

竹本都太夫

野澤語左衛門

神 鶴

馬 澤

里 勝

芳 助



謹 賀 新 年

大垣市城畔

吉岡十八公

名古屋市

社本兼太郎

富山

土屋源章

東京女優歌舞伎劇

みぶり劇家元

竹澤龍造

自宅 熱海市旭町「新鈴よし」

電話熱海三四三〇番

竹澤亀次郎  
座員弟子一同

本部 淺草區馬道三丁目十五

支部 函館市相生町十八

支部 旭川市三條通九一

支部 京城府永樂町七八

謹 賀 新 年

鶴澤司好

鶴澤好造

野澤道之助

鶴澤絃平

謹 告

舊臘左記へ轉居仕り候何卒倍舊の御愛顧偏に  
御願申上候

芝區高輪南町三〇

(碌々商店裏)

豊竹駒登太夫

鶴澤寛三郎

鶴澤蟻三郎

謹 賀 新 年

竹 本 素 女

竹 本 佳 照

義 太 夫 座

竹 本 駒 若

自 宅 淺 草 區 田 島 町 三 七  
電 話 淺 草 三 六 三 〇 番

竹 本 播 志 保

謹 賀 新 年

名物 御守最中

うろこ餅

み の り

高級あられ五種の詰合  
御進物用……金壹圓より

煉羊羹

★★★★ 趣味の名菓

名なし草

★★★★

花の名にちなめる小形菓子  
三十餘種を取あはせたる純  
江戸趣味の御菓子

御進物用かん入  
風流壺入  
はかり賣金八拾錢より

日 本 橋 水 天 宮 前

三 原 堂 本 店

電 話 茅 場 町 二 六 六 六 番

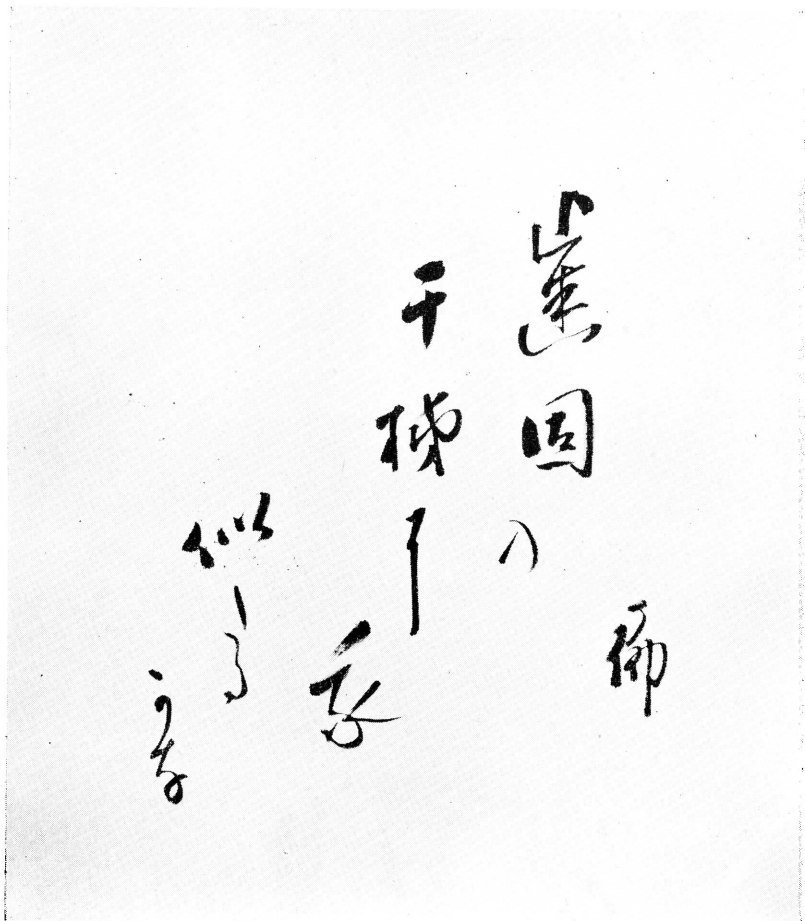
太 棹 社

富 取 芳 河 士  
同 三 久 子  
關 本 邦 治

栗 原 印 刷 所

牛 込 區 早 稻 田 町 五 八  
電 話 牛 込 一 四 五 一 番

念記號百『棹太』



筆人上佛句谷大

念記號百『棹太』



筆伯畫雲翠室小

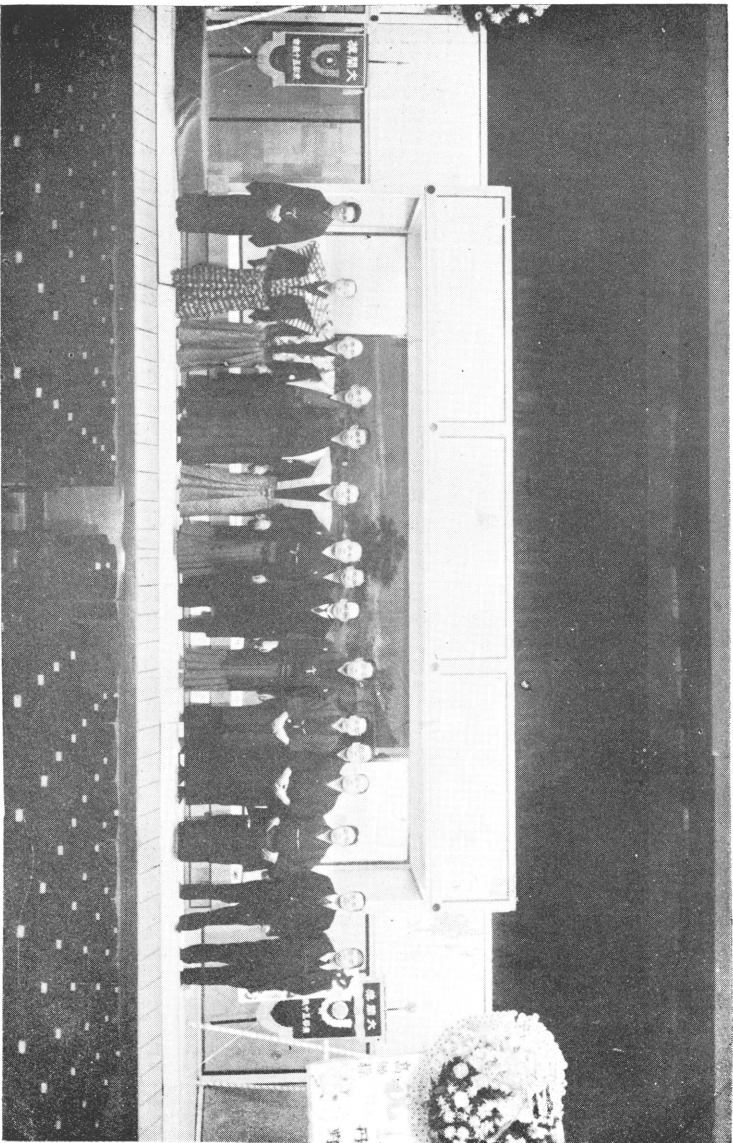
念 記 號 百 『 棹 太 』



筆 伯 畫 折 不 村 中

# 高瀬操氏十五義正大會引祝賀記念

鶴眞向つて右より 齋藤正風・藤本喜鳳・村田玉寶・及川旭・鶴澤辰六・豊澤扇之助・豊澤慶三郎・長谷川文久・柴野筑波



野澤道之助・高瀬操・細川清・安藤光榮・吉田三芳・星野桔梗・豊澤美之助の諸氏

(照參號前事記) 催開に部樂俱橋本日町濱日十月二十

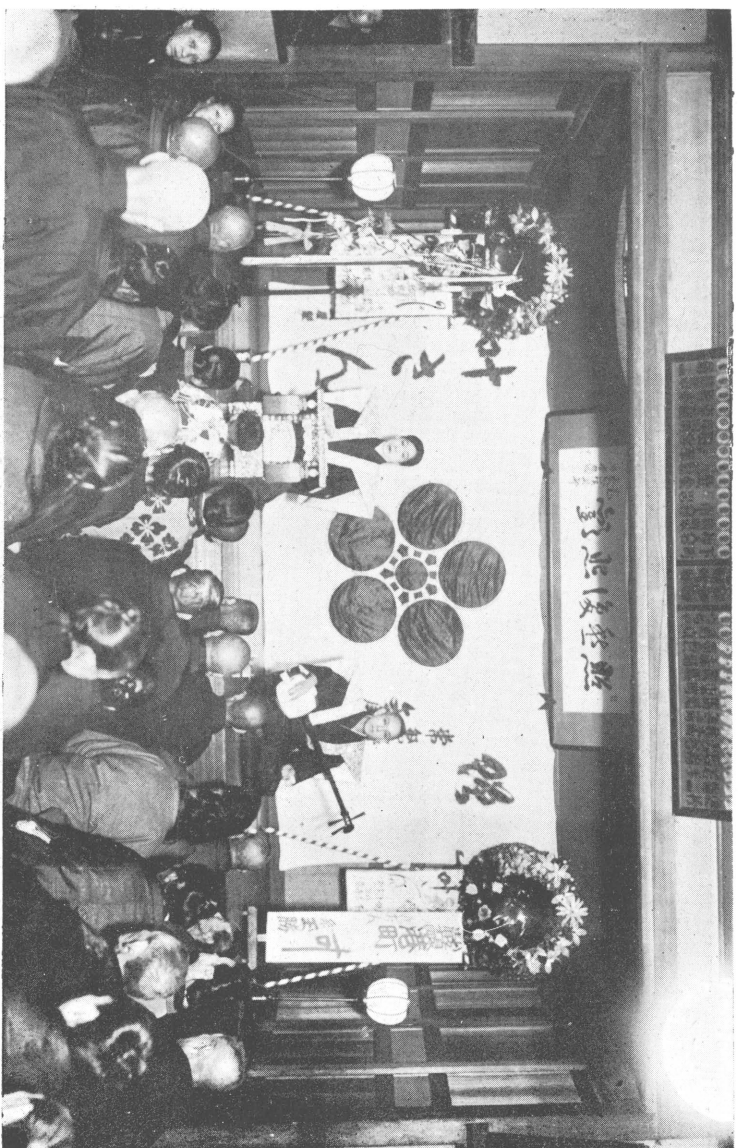


# 小川都川氏の静御前



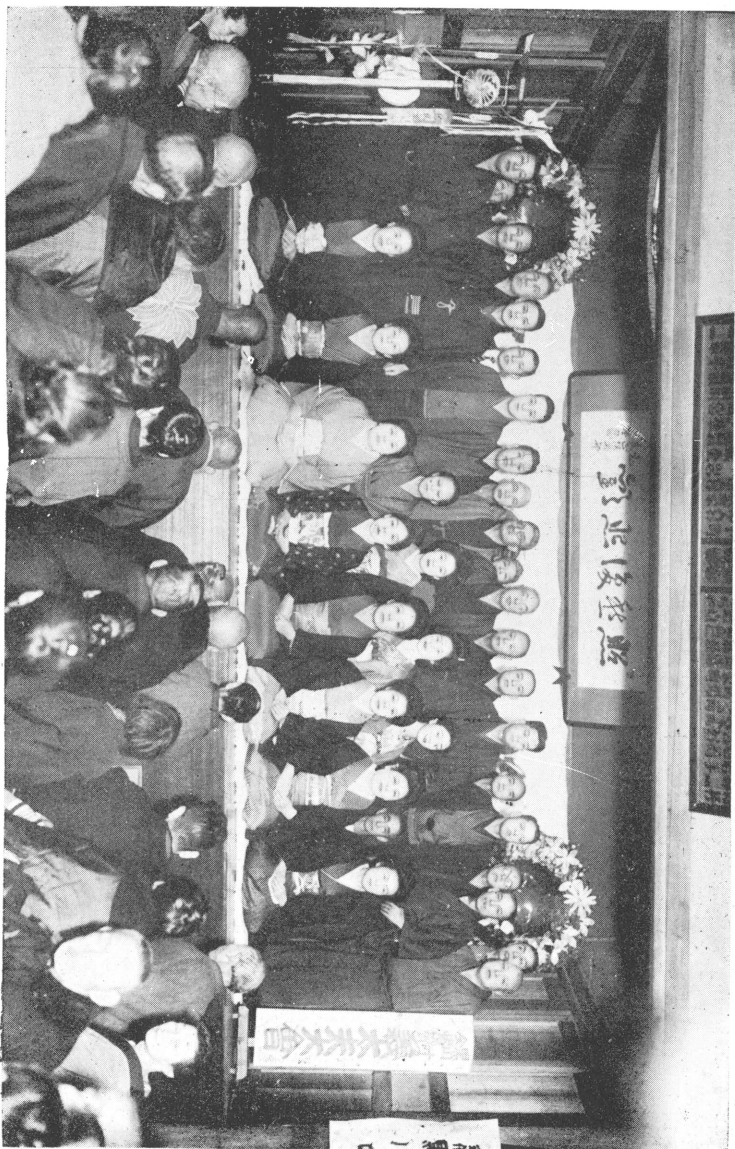
花柳柳輔主催漢口陥落記念祝賀舞踊會が、長唄杵屋勝昇社中、清元延壽太夫社中、鳴物田中傳一郎社中などで、十一月十三日丸ノ内仁壽講堂で賑々しく開催されましたが、當日、小川都山氏の令夫人都川小川すゞ子様は吉野山の静に扮してそのあざやかな演技は満場大好評を博しました。

念記會大夫太義賀祝快全氣病氏叶川黑



師勝玉澤鶴線味三氏叶川黒は座高

# 黒川叶氏病氣全快義大夫記念會



眞實前列向つて右より「若好・田附巴雀・高野真代子・歸山歸世花・黒川叶・吉田登盛・近藤津佐美・勝助妻女の諸氏

後列中央が黒川叶氏夫君外右三人目より「豊竹岬太夫・豊竹巴太夫・野澤糸造・豊澤猿藏・豊澤扇之助・鶴澤勝助・鶴澤龜造の諸師

昭和三十三年の栄冠に輝く人々

第廿八・廿九回東都十五義會に於ける東大關並に入賞者

富田紅陽氏



第廿八回二等

及川旭氏



西大關

高瀬操氏



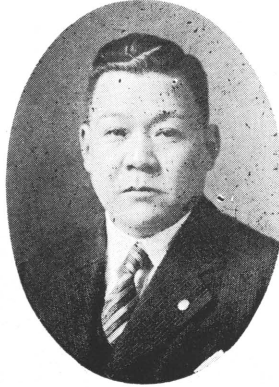
東大關

米澤春樂氏



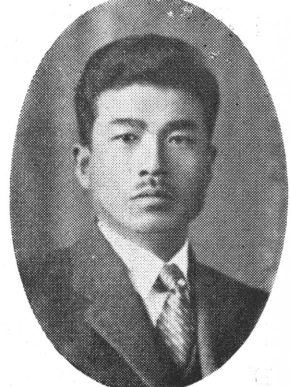
第廿九回三等

田口重司氏



第廿九回二等

金田金鳳氏



第廿八回三等

此は合す遺憾掲載を得ず。此の外田村玉寶氏等外賞入に眞實の間



太 棹 第百一號目次

義太夫雑話	齋藤拳三	(二)
笑ひと腹	坂本猿冠者	(五)
戯曲の人名	豊島丘山人	(六)
名人豊澤松太郎師を偲ぶ(一)	川端柳蛙	(九)
讀者の領分	關本邦治	(一四)
	岡田蝶花	(一四)
	森三好	(一四)
院本の話	宮澤淡々子	(一七)
『太棹』總目次(二)		(一八)
太棹社彙報		(二)
玉井松樂氏と近江とめ子様を悼む	芳河士	(二七)
當座帳	芳河士	(三〇)
編輯後記	芳河士	(三〇)

口 繪……大谷句佛上人筆・小室翠雲畫伯筆・中村不折畫伯筆・高瀬操氏

引退祝賀會・小川都川氏の靜御前・黒川叶氏病氣全快祝賀會・  
昭和十三年度に於ける榮冠に輝く人々

表紙・カツト……宮尾しげを……

# 義太夫雑話

齋藤拳三

## 攝津大掾と大隅太夫

明治三十六年五月、六代目春太夫から攝津大掾へ改名披露の御靈の芝居に、三代目大隅太夫は單身、文樂へ入座出演した。此れは明治三十九年六月、伊賀越八ツ目を語つたのを最後に退座するまで續いた。其の相三味線は當時鶴澤叶と云つた、壯年時代の現古靱太夫の相三味線だつた、三代目清六が勤めた。

是は傲慢自尊を以て一代を貫いた大隅が、名人團平によつて鍛へた完璧独自の藝風を、大掾を首領とする文樂座の頭目連と共演して、其の存在を天下に問ふとするのが第一の目的であつた。大隅の考

では自分と並んで出演する大掾の藝の如きは聽集にとつては晴天の霜の如きであると自負した。

此れは大隅の心算通り狂ひは無かつた玲瓏、玉の如き大掾の美音の妹脊山御殿の後で聽く大隅の壺坂は、全く段違ひの味さで、聽集は始めて盲人の悲哀と世話女房の純情をまざくと義太夫節に描き出した壺坂を聞いて驚喜した。文樂座の定連は全く啞然として、暫く感嘆の聲さへ出なかつた。

大隅の偉さは、名人團平の澁難至極の義太夫節に於ける極至の理想を、執拗にも會得して美事に現實に高座に表現し得た事にある。

私は彼の至藝を古靱太夫、土佐太夫、道八の三氏から再三聽いて居る。

以上の三氏は私が時期を同くした爲にそれぐの妙技に接し得た事を幸福と思つて居る練達の人だけあつて、皆藝評は可成に點が辛い、然るに三氏とも口を極めて大隅を賞揚してゐるのを見ても大隅の非凡が解る。

然るに此處に一つの美談がある、其れは文樂の人々が黨派的な反感から、大隅の妙技を聽かうともしないのに、高座裏から毎日熱心に立聞きして居たのは攝津大掾一人だつた。

其れ以來の大掾は九段目でも先代萩の御殿でも所要時間が五七分程短縮された此れは全く大隅の影響であつた。私は功成り名果げた大掾の晩年に、此の良き精心の有つた事を藝道の佳話として持筆する。

大隅は全く藝が味いだけの人であつた大掾には其れ以外に偉さの何ものかが有つたのである。

## 大隅太夫心一件違説

大隅が團平の猛稽古で、氣を失つたと云ふ話は餘りにも有名である。

春子太夫時代姫路の旅興行で合邦の「オイイ」の件が團平に氣に入らず、何時まで経つても後を弾いてくれない、一心に怒鳴つて繰り返してゐる間に、見臺へ顔を伏せて放心状態になつたが、團平は靜かに大隅を見つめるだけであつた。

(木谷蓬吟著、文樂今昔證による)

私は別の一説を聽いて居る、年代は不明である。大隅は團平の糸で初役の志度寺を語つた「南無金比羅大權現々々々々」と云ふ例のお辻の祈の處へ来た、團平の三味線は益々さえて来たが、大隅は顔面青白となつて失心状態で見臺に顔をふせた。現今ならず幕を引いて醫者を呼びにやる所だ、當時の藝人は變つて居たが、お客の方も尙變つて居た、團平は平氣で益々平強く弾いてゐる。お客の方も「とをくく大隅は團平に弾き殺された」と云つて感心して見て居た。下で湯をくんで居た伊達太夫は思はずヤツと氣

合をかけた、猛然頭を上げた大隅は美事に後を語り込んでいつた。

床を下りると團平は大隅よりも伊達太夫に、よくあそこで氣合をくれたと賞めたさうである。

私は八丁堀や佐竹原の講釋場で聞いた寶井馬琴の武勇傳の様な此の一説を興深く思つて居る。

## 吉田多爲藏と三代目

### 鶴澤清六

人形淨瑠璃三業の内、太夫では何としても偉いのは三代目大隅太夫である。其れは團平の持つ理想の義太夫節を高座に實現したからである。教へた團平以上に教つた大隅に敬意が持てる。が一方、人形使ひと三味線では多爲藏と故清六が偉いと思つて居る。

此れを讀んだ讀者は啞然として笑ふだらう。然して、曰く何々、曰く何々と數十の名人上手の人形使ひと三味線を上げるであらう。

然し不幸其れ等の名人は、私には明石

志賀之助の角力の強さや、宮本武藏の劍術の味さで、全く程度が解らない、想像が附かない。

多爲藏は晩年文樂座を餘りにも出たり入つたりした、然し此れは常に後身の養成——下級の人の給金が自然に此れに於て居る——に就て、仕打と意見を異にした事に原因して居た、加ふるに彼は復業にお茶屋をして居て、芝居を休み得る身分境遇だつたのである。

三人使ひの人形は、吉田文三郎あたりより次第に進歩して、多爲藏を以て終つたのではなからうか。私は人形を人形らしく使ふ事より、一步を進んで人間らしく使つた最後の人の様に思はれる。

一例が合邦の「まだ俊徳様と女夫に乗りたい」の件で、大玉造は女の衣服の棲を取る仕草をした、今でも此處は棲こそ取らないが、女の形をする、多爲藏は決してこんな仕草をやらなかつた、「其れこそ幽霊」と云ふ件で、幽霊の形をする型を、身ぶるひをする型に改めてゐる。

又、六段目の勘平は、兩手へ赤い血をぬ

つて其の上を白衣でまいて出る、即ち切腹の件になつて、白布を取ると血紅が出るのである。此れ等はゆきつまつた三人使ひの人形に如何にして新規畫をこらしたかが観へる。

此の人は大きな人形を使ふ爲に「附き上げ」を二本も三本も使つた爲、晩年胸を病んで早世したのである。

清六は若年にして、常に當時の中心人物の合三味線を勤め通して居るのに敬服する。

身の上の太夫を弾く三味線が、常に御無理御もつとも自分の藝を殺して弾いてるならば甚だ平凡だが、常に太夫を助けながら其間自分の藝を見事に發揮するのは至難至極である。

清六は一生を通じて上の太夫を弾き通して死んだ、然も最後に育てた太夫が、今日斯道を双肩に負ふて居る現古靱太夫をして、今日あらしめる基礎を作つて居る。

私は僅かに残る壯年時代古靱太夫と、共演の妙技の偏隣を傳へて居るレコードが市場から姿を消した今日、其の妙技を惜んで此の小文をものしたのである。

## 冬 十 句

富取芳河士

新米運ぶ馬ゆつたりと街道一杯の日當り  
みのり穂の行事もすみて村豊か  
藁屋二軒並び柚子眞黄ろ時計のんびりと鳴り

### 越後にて

箕こぼれに鶏が来て時雨雲夕映え  
北風の夜の圍爐裏にて皆が火ほてり  
一と荒れは風二た荒れは雪となり  
刈株黒々と水田波立ち冬の風  
枯蘆折れつくし沼水落ちつくし  
稻架木並み立ち風は田の面吹きまくる  
市の立つ町騒然と師走風



笑

ひ

と

腹

### 坂本猿冠者

芝居でも、義太夫でも、笑ひと云ふ奴は至難のものである。

泣く事や、泣聲なら、義太夫を語る初心者でも、芝居をやる素人役者（僕もお仲間だが）でも、直ぐにやれるが笑ひとなると一寸出来ない。

笑ひの中でも時代の笑ひ——ウフ、ハ、ウハ、と云ふ奴は練習すれば、初心者にも笑へない事はないが、世話の笑ひとくると修業が積まねば笑へるものではない。

河内山の馬鹿奴ウハ、、、の笑ひ、夜叉王の我乍ら天晴れ天下一ちやウハ、、、の笑ひ、義太夫の方なら帯屋の長吉や儀平の笑ひなどは、駈出しの役者や太夫には笑へるものでない。

笑ひが本當らしく笑へてくれば、義太夫を語る人なら相應に腹が出来てき

た人、芝居ならば一人前の役者に近づいてきた人と云へる。

芝居でも、義太夫でも腹と云ふ事は一番大切な事で、腹に答へた聲量が出れば、悪聲でも義太夫の節廻しは充分にきかす事が出来るし、芝居なら、どんな素のせりふでも隅々まで通るやうになる。

腹が出来ないと、咽喉で聲を出すから、聴客、観客の耳へ、割れてしまつて、よく透らない。

新劇の連中が大劇場へ進出すると、一番に氣を揉むのはせりふが通らないと云ふ事だ、せりふが何を云つてゐるか分らないときたら、その芝居はゼロになる、演出家が新劇の役者に第一番に注意して居るのは、せりふを通すことだと云つてゐる、處で、役者連中は怒

鳴ればせりふは通るものと思つてゐるらしい。

何故演出家は腹から聲を出す修業をやかましく云はないのかと思議に思もはれる。

六代目にしろ、喜多村にしろ、決して怒鳴つてゐるのではない。それで隅々までせりふの通るのは腹から聲が出てゐるからだ。

とかう書くと、申談云つてはいけない、六代目と喜多村とはせりふがきこへないので、いつも面白い芝居をつまらなくしてゐると、云ふ人も出るかも知れない。併しいくら聞えないと云つても、駈出しの役者が咽喉で怒鳴つてゐるほど雑音は交つてゐない。

その腹の薄いか、厚いかを試すのは、笑ひが一番だ。腹のしつかりして居る時は笑つて腹に答へるから解る。腹が薄いと笑ひ尻が消えてしまつて、腹に答へてこない。これは義太夫を語る人や、舞臺で笑つたことのある人には直ぐ了解出来る事だと思ふ。

芝居や義太夫ばかりではない、腹が一番大切な事は處世法の上にも應用出来る。



# 戯曲の人名

豊島丘山人

戯曲に現はれる人名中には、本名、替

名、作名と種々雑多あり、先づ以呂波を代表した假名手本忠臣蔵から説き起して考の及ぶ限り牽引話を試みやうと思ふ。

變名に就ては萬葉集の研究の如く、人々の考へに依て多少の差異は免かれまいが傀儡師の人物箱、何が出るか譯も無い戯曲通士、暫くの御辛抱を乞ふ。

赤穂義士に關する著作頗る多し、先づ左の數種とす。

假名手本忠臣蔵  
いろは評林  
忠臣一力祇園曙  
座景色雪之茶會  
忠臣墳盟約大石  
忠臣いろは實記  
日本花赤穂驪籠

大矢數四十七本  
泰平いろは行列  
いろは藏三組盃  
太平記忠臣講釋  
小袖藏いろは配  
難波丸金鶏  
碁盤太平記

忠臣後日噺 忠臣金短冊  
まだ此外に二三種はあらうが、右の如く數種あると共に、その人名もいろ／＼に變作されてゐる。

## 大石内藏助良雄 (實名)

大岸宮内・大岸由良之助・大星由良之助 (以上變名)

大岸と大石は段通音で、宮内は内藏の内を一字生かした迄で、替名としては妙ならず。大岸由良之助は稍韻字が調つてゐる、内藏を由良とするは通音似口的のみで意味はなからう、是は享保十八年豊竹座に上演した忠臣金短冊にある名で、なほ一層優れた名は大星由良之助である。大石と大星韻の通ひは少々無理ではあるが、大岸と呼ぶものとは雲泥の差がある

衣笠内大臣家長卿の歌に

大空に川邊の石は昇りつゝ、

星となるとも君は忘れじ

といふのがある、右は川邊の石が空に昇つて星となる様な大變事があるとも、天皇の御事は忘れ奉らずとの心を詠んだもので、これは神功皇后三韓(馬韓、辰韓、辨韓)征伐の御時、新羅王が朝貢すると『河石昇りて星辰となるに及ぶ迄云々』と誓つた詞である。又、物あり、流星の如くにして地に落て塊を爲すを星石と云ふなどのことから言つても、星と石とは形より見るも相似た點がある。之に依り作者が活用した大星の替名は味いものである。假名手本忠臣蔵は竹田出雲並木千柳の合作ではあるが、大星由良之助と名づけたのは近松門左衛門であると曉鐘成翁が言はれてゐるが、大石の本名は其妻お石と名づけて表明してゐる。

## 淺野内匠頭長矩 (實名)

鹽谷判官高貞 (變名)

## 吉良上野介義英（實名）

高武藏守師直（變名）

抑々元祿の大敵討の原動力淺野長矩、吉良義英の事跡を演ずるに何が故に建武時代の人物鹽谷高貞や高師直等を代用したかと言ふに、時世を憚つたのは素よりであらうが、鹽谷判官は播磨で一族滅亡の中跡を残した人で、師直は高貞を讒して苦めたといふ曲者であつたからであらう。

史に曰「鹽谷高貞の妻姿色あり、師直姦せんとすれど従はず、遂に自殺す、師直之を聞きて大に怒り、高貞を讒して殺す云々」  
又或書に曰「鹽谷高貞讒言を避けて妻子を良從に預け先へ落し遣はしけるに播磨の陰山にて追手に出合ひ戦ひつきて一族山城守宗村鹽冶が妻子を刺殺し切腹す、其外二十二人家に火を放ち切腹して焼死す、斯くとは知らず高貞舎弟と七人共に落行くに、又の追手に出合ひ七騎討死して高貞を出雲の國へぞ

落しける、其後高貞同國にありて妻子の死を洩れ聞き終に切腹す、云々」とあり、此説に基けば高貞は實に播州

に由縁ある人で、播州赤穂の義士を演ずるに鹽冶の史跡を引用したのも道理で、又家人二十二人の切腹と言へ、高貞の切腹と言へ、誠に伯仲した好材料と言ふべきである。

## 梶川與三兵衛（實名）

加古川本藏（變名）

附 戸無瀬 小浪

梶と加古聊か似てゐるが、此名は似口ではなく、加古川と本藏とは矢張高貞の一族戦死の地に基因してゐるのである即ち此地は加古の渡りの西に當つてこゝぞ仕組みの本なるが故に加古川本藏が現はれ出たのであらう。河水に因みて戸無瀬、小浪といふ女房と娘が附いて出るが此二人は加古川を詠んだ古歌の句から採つたものと聞くが、未だその證歌を探ぐり得ぬのは残念である。

## 大石主税（實名）

大星力彌（變名）

大石と大星は前に述べた通りだが、主税は力に通じ、これに彌文字を添えたもので、彌は文彌、三彌など、美少年の名に多ければ、彌出て彌作者の妙所に感服

## 武林唯七（實名）

竹森喜多八（變名）

武と竹は通音、林に木を添えて森とし唯と喜多はほゞ似て、七に一をまけて八とした處はおかしき組立である。

## 大高源五（實名）

大鷲文吾（變名）

高を鷹にとり轉じて鷲としたもので、源五の似口は傳吾善吾などゝすべきであらうが、殊更に文吾とした處は、小説の名に文吾はまゝあるが傳善などはなし、よく氣が配られてゐる。

# 原 惣右衛門 (實名)

原 郷右衛門 (變名)

原を變姓しないのは相當する文字が無  
い爲めか、荒、唐、波良でも妙ならず、  
惣と郷は矢張り口的。

# 伊達左京亮宗春 (實名)

桃井 若狭之助 (變名)

伊達左京亮宗春は淺野長矩と同様饗應  
接待を司つた人で、桃井若狭之助に相當  
してゐる。南北の頃桃井播磨守直常とい  
ふ人があるが、恐らく此人の作り名であ  
らう。又桃井の館に三千歳といふ姫を假  
設したのは、三千歳生る桃を取りし東方  
朔の故事から採つたものであらう。同段  
にて加古川本藏が主人を諫むるに松ヶ枝  
を截るは實説で、梶川與三兵衛が長矩を  
抱き止めた場所は白書院の松の廊下であ  
るから、是に基いた作意であらう。又長  
矩切腹の時に檢使として來る役人は庄田  
下總守・多門傳八郎、大久保權左衛門の  
三名であるが、脚本では石堂右馬之丞・

藥師寺次郎左衛門の兩人としてゐる。石  
堂は南北の頃石堂義房といふ人があり、  
藥師寺は足利の臣下にあり。大樹常憲院  
殿を足利直義と替名したのは一寸ふさは  
しくない。直義は尊氏の舍弟で奸悪な人  
であつたからであらう。元新田家に仕へ  
後高貞の妻と作意せし額世御前は容色麗  
はしきより額吉としたものか、腰元お輕  
は例の使する和歌の句の重きが上から採  
りし輕重の組立てか。

外實名替名を列記すれば左の通り。

大野九郎兵衛(斧九太夫) 萱野三平(早  
野勘平) 神崎與五郎(千崎彌五郎) 赤埴  
源藏(赤垣源藏) 間重次郎(矢間重太郎)  
矢頭右衛門七(佐藤與茂七) 不破數右衛  
門(不破勝右衛門) 寺坂吉右衛門(寺岡  
平右衛門) 大野軍右衛門(斧定九郎) 小  
野寺重内(小野寺十内)  
右の外寺岡の播磨名所を因んで節間宅  
兵衛と名乗るの類はなほあらうが、くだ  
くしければ忠臣藏は此邊にて藏入りと  
して、次號には又改めて他のものを。  
註。鹽谷と鹽冶の二説あり、姓氏錄に  
は鹽冶とあり。

謹賀戰捷之新年

歸山歸世花

謹賀戰捷之新年

吉良蟻若

人名  
**豊澤松太郎師を偲ぶ**  
 (一)

川 端 柳 蛙

……豊澤松太郎……

何と云ふ大きな存在であらふ。初代豊澤團平師を斯道の人は日蓮様と云ふそうだが、私はこの松太郎師を斯道のお天道様と云ひたい。人類の一番大切なものは太陽であると同様に、斯道に於ける師の存在は最も大切なものであつた。日に日に衰退を辿りつゝある義太夫節を是正するかの様に、高所より黙々として太陽の様な光りを放つて居たのが師の姿であつたこの偉大なる斯道のお天道様は終に雲に隠れたのである。

昭和十三年十月十九日午後二時十五分  
 噫——この日は何と云ふ黒日であつたらふか。今の世に残れる唯一の名人、

不世出のこの達人の靈魂は永久に滅したのである、斯道の爲め、何と云ふ悲しんでよいのか、私はその詞を知らない。現在の淨曲人にして、直接關接の違ひはあるが、師の藝恩を被らぬものは幾人あらふか。大阪淨曲界上層部の人達は、百里の道を遠しとせず、寸暇を利用しては常に師の門を叩き教を受け且つ研究して居る。津太夫師、古靱太夫師を始め、新左工門師は云ふまでもなく、友治郎師の如きは最も熱心な師の信者である。斯かる斯道の權威者であり、斯道の手本となり後人のよき指導者である人々にして師の藝風を研究して居らるゝを見ても、如何に師の藝格が貴ひものであつたかど願

謹

竹本津太夫

賀

新

年

豊竹古靱太夫

づかれる。

斯道には古來より幾多の名人達人を産出してゐる、併しその多くは表現藝術としての權威であつて、自個の命掛けの修行に依つて會得した貴ひ藝風を後人に残すと云ふには熱心の足らぬ嫌ひがあつたやうだ。氣に入りの極く少數の門人へ口寫しに傳へると云ふ事が最大の方法であつたやうだ。故に二代三代と傳はる中には、名人苦心の風格を正確に傳へ得るとは保證仕難い。二段や三段と違ひ、何十段何百段を口寫しに教へる事は到底出來得ない、故に確實な朱入本として残すより方法はない。併しこ 仕事は中々の難事である。五十段や百段の朱本を残した人は幾何もあるが、師の残せし朱本は千段を遠く越へてゐるのであるから驚嘆の外はない。其中にも最も貴ひものは、現在全然行はれてゐない古曲が數百種と道行物が百數十種からある事である。是等

を一段／＼丁寧に入未し、風格の區別を明らかにし、其上師の解釋を附記してある。斯道の知識ある者が見れば一目瞭然

と云ふ實に貴ひ書である。千外古來より斯道の秘傳虎の巻として、一切他見を許されなかつた『節盡し朱の鑑』並に初代團平師が師の爲めに特に書残してくれた『口傳』と稱する秘書とがある。これ等は特に他人に知れぬ様符喋で入朱してゐるのを、後人の爲め斯道共通の朱に人替へて残してある。

斯くの如き前人未踏の大事業を完成するまでには、師は四十年の歲月を捧げてゐる。師は娛樂とか趣味とかと云ふものは何にもない。只淨曲の研究が趣味であり娛樂であつたのである。朝は五時には必ず起床され、神佛を禮拜して直ぐ机に向ひ筆を取る、そして三味線を弾いては研究される。三味線の音がしてゐなければ必ず筆を持つてゐると云ふ精進振りであつた。それが終日……否……終年……四十年間の全部の生活であつたのである。凡骨のなし得られる事ではない、眞に神であるとしか思はれぬ日常であつたのである。猿之助師は尊父のこの精勵努力振りを見て、健康を氣づかひ、たまには温

謹	賀 新 年
竹本鍛太夫	豊竹呂太夫

泉へでもと誘はれても『温泉へ行つても  
三味線を弾くのが氣兼ねで研究が出来ぬか  
ら』と云つて終に行かれた事はなかつた  
そうである。

大正十二年の春の事である。數十年の  
努力に依つて完成された『節盡し朱の

鑑』初代團平師の秘書『口傳』並に煙滅  
されて廢去となつてゐたものを苦心の結  
果調へ上げた『古曲』等種、不明となつ  
てゐた『古曲節調』其他義太夫節に關す  
る得難き著書を、東京音楽學校へ寄附さ  
れた時、同校教授黒木勘藏先生が師を訪  
問されて、土藏の中に山積されてゐる著  
述を見て驚嘆し『斯かる大著書をこの儘  
埋もらせて置くは残念である。斯道の爲  
め廣く公開されては如何』と勧められた  
極端な謙遜家である師は、今まで一門の  
人々により再三勧めたのにも耳を貸さな  
かつたのであるが、黒木先生の勧告に始  
めて決意して、一門の人々の協力のもと  
に秋に展覽會を聞く事に決定して準備に  
かゝつた。そしてこの一大事業の記念の  
爲め前記『節盡し朱の鑑』と團平師の『口

傳』を菊版六百ページのものに纏めて斯  
道の人々に寄贈すべく印刷所へ廻し、最  
早完成近くなつた時、あの大震災に遭遇  
して、原本は勿論、得難き参考書籍全部  
を烏有に歸し、師の一大事業は挫折のや  
むなきに至つたのである。

この時一門の人々の落膽は非常なもの  
であつた。師の心境を察して何と慰めて  
よいか詞もなかつた。師の感情に振れる  
事を恐れ、皆云合せて此事に振れる事を  
させてゐた。併し凡人でない師は泰然と  
して、餘震の未だ終らぬ假宅の中で、ロー  
ソクの火影をたよりに再度の大事業を目  
指して第一歩の筆を染られたのである。  
猿之助師はこの様子を見て心配され、  
老體の上非常な傷動を受けてゐる際とて  
健康をそこねてはと『この際充分静養さ  
れて、家でも出来てからゆつくりとなさ  
れては』と勧めると『イヤわしが仕なけ  
れば世に埋れてしまふ古曲が澤山ある、  
それを思ふと一日もじつとしてゐては  
祖先へ申譯がない、この仕事は御師匠様  
(初代團平師)から命ぜられたわしの使

謹

賀

新

年

鶴澤道八

豊澤廣助

命である』と非常な決意のもとに机に向かはれる尊父の姿から光を放つたやうに感じられ、余りの貴さに思はず手を合せて拜んだと云ふ事である。

幸ひにして前に音楽學校へ寄附した著書は火災を逃れたので、借用して参考として、震災後十五年にして再度の大事業を完成され、祖先への忠も盡し、師への義も果され、大安心のもとに大往生とげられたのである。

この貴ひ大著書は、猿之助芳太郎兩氏の手で保存されてゐるから、今後何かの機會に世に公開される事と思ふ。

次の記事は大正十二年の春、師が著書公開を決意された時、都新聞に掲載された記事である。

名人豊澤松太郎が  
 一代の偉業  
 古曲珍曲の保存秘傳  
 二冊の寄贈

我が日本の義太夫界で名實共に優れた豊澤松太郎は大阪の土地を去つて三十年

竹本朝太夫の合三味線として相變らず雄渾な技藝の持主であると同時に、其繊巧にして別健な音色は斯界の國寶として珍重されてゐる。其松太郎が今度近松の二

百年、義太夫の祖竹本義太夫の二百年自分が朝太夫を弾いて三十年と云ふ、いろ／＼を記念する爲めに非常の大苦心を以て節付した古曲類千五百段を稿本三部にして東京音楽學校に寄贈し、別に菊版五六百ページの書籍として目下印刷中今秋出來上る筈になつてゐる。松太郎は今年六十七、折あれば机に向つて煙滅された古曲を調べ、或は不明になつた節付けを考へ、こゝに此著述を完成する事になつたので、其中道行物計りを集めたのが十六卷にして百十六段「關羽」「京名所」「橋供養」「古戰場しのお寶」「源家七代集」「富士見西行」「源氏十二段」「自然居士」など珍曲多く尙ほ大阪の郷土藝術とする地歌の煙滅されんとするもの二卷數十回さへ節付したのが別にあると云ふ。其精力と篤學努力は眞に驚嘆すべきものである。まだ此他に院本の研究、古曲節調の研究、

謹	賀	新	年
鶴澤清六	鶴澤寛治郎		



其他秘傳とされてゐるものなどを纏めて見込まれて稻荷座では名人組太夫、大隅全部音楽學校に寄贈したので、同校教授太夫を弾いて嘖々の盛名を馳せた人である。尚ほ松太郎が斯う云ふ研究を永年續の著述を見て驚嘆したと云ふ。要するに、其道の知識あるものが見れば誰が見ても、人々に知らせず、唯自分一人丈けで今日ま其節やら三味線やらの手が、直に判るやうに細かく朱を入れた寫本やら、義太夫で續けて來たものだが、それを何としての参考資料などを一纏めにしたもので、も此儘で埋れさせて了ふのは残念だといつて息子の猿之助、芳太郎其他門弟連から成る師恩會から勸めて漸く世間へ發表學校へ寄贈したのを更に寫本して、今秋する事になつたと云ふが、兎に角義太夫展覽會を開いて一般に公開する事になつてゐる。松太郎は人も知る十歳の時、先道に取つては復興の神とも云ふべく眞に代濱右衛門の門に入り、其後初代團平に稀有の話である。

謹 賀 新 年

料理店 二 葉

錦 さと

深川區白河町一ノ六  
(區 役 所 通 り)

年 新 賀 謹

桐 竹 門 造

乙 女 文 樂

桐 竹 紋 十 郎

讀者の領分

匿名投稿は掲載致しません

佐渡の句を讀みて

關本邦治

佐渡の句會を一讀せし後、最も深く印象に残つた句は、前號に申上げた通りです。

盗人のなき島にゐて秋涼し

これは一茶を偲ぶ酒脱味。全ての藝術に於て最も重にして且つ大なる事は、その藝術のかもしれないが表現及び内容の個性でせう句によらず、畫によらず、作者の個性即ち氣品が讀者をしてその胸裡をうたしめる事が、最も肝要な事でありませうまいか。この點あなたの句は個性の個性たるものが我々をして會得せしめる様です、門外漢の小生のたわ言お笑ひ下さい。

淨瑠璃道

第三回素玄聯合淨曲  
研究会に於ける講演

岡田蝶花形

本日、この麴町區公會堂に於て淨曲研究会公演を催し、麴町區長はじめ多數の區民諸君の來聽を得て、茲に御聽かせする義太夫は、藝にして藝に非ず、所謂淨瑠璃道である。即ちこれは身を守る、自分のものである。即劍道と同じで自分の爲めにするので人に見せるべきものでない。語る人が人形の心を以て自分の心とし、自分の身を修めるを以て足るのである。そしてその心が即仁義忠孝順といふ五行で、それが又天下を治め國家を統べる根元となるのである。即かく高座で義太夫を語る心は即天下を治める心である。

かく話し來ると何だ人を馬鹿にしてる。義太夫は人に聽かせる藝でなく自分で研究にするのだと、何だ馬鹿々々しいと思ふが研究といふ以上熱を以て演じ、人物を語り生かさなくては自分の修養にならぬから従つてそれは聽いて居ても非常に面白いのである。

自分のものとせず只師匠の口眞似してそれを人に聽かせやうといくら美音珠を轉じてもそれはテツトも面白くないのも道理である。

謹

淺草音女會

(イロハ順)

米惠比壽家 富千代

浪花 家かきつ

新春菊の家 綾春

三壽志三 勝

竹本志磨吉

竹豊の家 昇之助

幹) 惠比壽家 富之助

(事) 日の家 八重吉

(相談役)

助 長谷川文久

吉本 平井 榮

新

年

賀

それ故我等會員は自分でやるのではなくとも、その語り物を味ふ上にそれは自分で信じる以上の努力を拂ふ。つまり學校でいふ豫習をする。それ故聽いて居て、これは面白いとかつまらぬとかハツキリするのである。

あの奥州安達原、新版歌祭文、本朝廿四孝、妹春山婦女庭訓、三日太平記、太平記忠臣講釋、伊賀越道中双六等の作者近松半二は何といったか『随分苦心して作はすれど下手な語り手に語り殺される』これは語る太夫が生物識りの勝手に文句を拔差したり又テツの多いため意味をとりちがへて傳へるからである。

先づ私の考へではよく師匠にこれを正すと共に、理解ある人に向ひ問ひて研究し、五十音の發言をよく査べて日本全國の人に開かせて文章の意味や、人形の心が明かに判別させなくてはならぬ。その爲めかゝる研究會を設立した理由でもある。

それ故に聽衆諸君に於ても唯慢然と面白いと云つて聞捨てしないで、又つまらないと心中に不平を藏しないで、よろしくどんな紙片にでも書いて樂屋にまで御投じ下さ

い。

われは藝人では無くて藝術家であるとして未だ研究中のものである。同じ手を叩かれるのも何處かうまいと教へて頂ければ嬉しいし、拙ければ拙いて何處か拙いと指摘して頂ければ有難い。それが参考となつて又これを發表する批評會ではそれを開いた他の人にも同様に参考となるものであるから、指摘して頂くことは決して其人一人の爲めで無く、多勢の爲めである。かゝる態度で淨曲を味へば無限に淨るりの趣味は盡きるものではない。右御願ひをする次第である。

### 義太夫の強固

森 三好

去る昭和十三年七月七日東亞の平和破れ日支事變勃發に際會し、斯道の状況如何と前途を憂慮せられたる愛義家も無きにしもあらず、然るに同年十一月の後援、忘年温習各會其他の出演はひきもきらず、某俱樂部の如きは十月中旬より十二月二十五日迄たつた一日の休演もなく連夜の出演盛況を呈

年	新	賀	謹
伊香保温泉	鶴巻温泉 小田急線鶴巻温泉下車	光鶴園 電話伊勢原二一番	箱根強羅温泉 茶代 廢止 觀光旅館 電話(園)一六〇番 宮ノ下(三)一一番
横手旅館 電話(八)七五番			

したり、如何に愛義家諸氏の御奮勵努力且は斯道練磨の意思強固にして斯界の旺盛を期して俟つものあり、洵に慶賀に堪へざる次第なり。又一面斯くあらざれば其技藝熟達は保し難かるべく、延ひては國家の資力彌が上にも底強く我が日の本の繁榮と豫て懸案の我國固有古典藝術擁護も遂行出來得るものと思料せられ安堵の胸を撫でたる次第なり。軍國の新春を驅る昭和十四の年賀に該り時局柄銃後の御奉公に勤しみ娛樂に體力を練り精神を養ひ、健康潑刺たる身を以て益々斯界の御發展を茲に謹んで祈るものなり。

## 滋養強壯劑

### ミラカチの効能

胃腸の弱き人、食慾不振の人、虚弱體質の人、妊産婦衰弱の人、病後の恢復の遅き人等の滋養強壯劑として闘病力の強化と榮養促進の作著し。

會

報

## 三華會

森 三 好

投稿  
歡迎

戰時下に生れし三華會は尙日淺きにも不拘、門下の御熱心と愛義家諸氏の御後援とに依り日を追ふて隆昌に向ひつゝあり、是れ偏に我が會の幸運の賜なり。第四回の出演は神嘗祭 佳節を以て見田村雨氏方に於て忘年會を兼ね開演盛會裡に終了したりしが、昭和十四年一月廿日午後六時より下谷交正俱樂部に於て左の如く出演する筈なり。  
御祝儀(竹本華代)日吉(むつみ、華代)紙治(戰捷、華代)野崎(三好彈語)先代(園樂、三好)安達(十三三、三好)寺子屋(村雨、しげる)忠六(しげる、華代)太十(華代、三好)

謹賀戰捷之新年

空氣がよくて

閑靜なアパート

蒲田區御園町二ノ一四

シハヴァウス

電話蒲田三六二二番

# 院本の話

院本は立作者があつて、終始一貫せる大筋を定め、其段毎に受持ちの下作者が各々意匠を出す處から、知らず前後撞着を來たすが如きことが往々あるやうである。且つ世人の耳に馴れたものを左に記して見ることにした。

## 宮澤淡々子

### 本朝廿四孝

二段目の切、上使村上義清が勝頼の首を受取らんとし、信玄の奥方常盤井御前は暫くの間捨と猶豫を乞ふ條で、上使の詞に

暫の用捨はしてくれんと庭に飛びをり垣根のおき根引きむしつて床の間の花生へ捻込みコレ此糧のしばむ迄は宥免致す花がしぼむとそれが寂滅いやと言はさぬ割符の下ト本院次の條で、勝頼が濡衣に向ていふ詞に

ヲ、其恨は尤もなれど親の赦さぬ徒なればどうてはかない花の縁もう糧もしぼむ時分隊入れは恥の恥泣かずとそなたは次へ行きや

四段目の中、謙信は諏訪の城に義晴の幼君後室手弱女御前お成の設けをなすといふ條で、腰元の詞に

尋常のお客とは違ふそれで此間より國々の名物をお求めなさるれど今此諏訪の湖に氷が張り詰め舟の往來も叶はぬ故何かが手づかへ

又その先の文句に

中能見ゆる中庭よりいきせき出づる簀作が今は姿も菊作り花恥かしき角額襟先に小腰をか、め奥庭の花壇の菊かむを伸し延びるを締め枯葉一枚ない様に残らす手入仕り漸く唯今相仕思ふ

とある、近年三ヶ年間の信濃諏訪の米詰月日を擧ぐると一月五日、一月七日、一月十四日(以上舊曆十二月四日、六日に當る)と勿論年々米詰月日は異なるが、兎に角十二月から一月にかけてである。依て、前の腰元の詞に證すれば、十二月初旬に此大賓を迎へたの

であらう。然るに今を盛りの菊花壇の御馳走といふ事は甚だ不似合で、しかも十種香の場て花作りの簀作は、衣服を改めて出て

誠にけふは霜月二十日我身がはりに相果てし勝頼が命日くれゆく月日も一年餘りなむ幽靈出離生死頓生ぼだい

と言ふ。こゝに於てその日は霜月二十日である事が知れる。さて此年に限りて米詰も常より早く、菊花壇も遅くまであつたとして見逃せば見逃せるが、二段目に出る勝頼身代りの時の朝顔は、いかに信州の時候が狂つたとて、霜月廿日に朝顔の花盛りとは奇怪である

本篇は明和三年丙戌正月十四日の刷本で、作者は近松半二、竹田因幡、三好松洛、竹田小出、竹本三郎兵衛、竹田平七等である。

### 謹賀戦捷之新年

# 瀧脇まつば

# 太棹』總目次 (二)

自第百壹號 至第百號

- ▼第拾一號——▼年頭詞(芳河土)▼淨曲そゝろ言(黒顔老人)▼攝津大掾晩年の一挿話(岡田翠雨)▼葛紅葉宇都谷峠(田村西男)▼義太夫人形座の日蓮記を見て(小泉眞吉)▼大向ふの手帖から(島東吉)▼加賀見山舊錦繪(一)▼淨瑠璃秘傳▼東都五十義會評(驢胖生)▼五十義會の採點を見て(門外漢)▼太棹俳壇(芳河土選)▼各地通信・會報・其他▼口繪(攝津大掾自畫贊)(中澤巴氏所藏)▼義太夫人形座・神馬里芳氏・關悅子氏・菊粹會・人氣投票當選三花形(駒若・越喜美・叶)
- ▼第拾二號——▼文樂座詣で(小泉眞吉氏撮影)▼續竹本劇と素人芝居(坂本猿冠者)▼菊五郎とお光(伊原青々園)▼鬼界島の舞臺稽古から(小泉眞吉)▼淨曲そゝろ言(黒顔老人)▼評(驢胖生)▼天理教祖傳(一)(藤井天海)▼加賀見山舊錦繪(二)▼雜報・會報
- ▼第拾三號——▼文樂座詣で(小泉眞吉氏撮影)▼文樂の如月興行(小泉眞吉)▼話のよせ鍋(岡田翠雨)▼妹香山(伊原青々園)▼加賀見山舊錦繪(三)▼フオラム(坂本猿冠者)▼菊粹會を聽く▼天理教祖傳(二)(藤井天海)▼大會と小會▼太棹俳壇(芳河土選)▼雜報・會報
- ▼第拾四號——▼彌生三象(小泉眞吉氏撮影)▼自嘲記(小泉眞吉)▼會我綉俠御所櫻(田村西男)▼加賀見山舊錦繪(四)▼壽樂會座談會(岡田翠雨)▼天理教祖傳(三)(藤井天海)▼太棹俳壇(芳河土選)▼大會と小會・五十義會採點表・聲義會採點表・會報・消息▼口繪(五十義會並に聲義會入賞の人々・竹本南部太夫・通話會劇・牡丹)
- ▼第拾五號——▼雪月花(攝津大掾作)

祝百號

小川都川

前號都浪とせし誤植を謝す

太棹社

祝百號

竹本南部太夫

前號連名中掲載洩れを謝す

太棹社

祝百號

竹本東廣

前號連名中竹本東玉と誤種せしを謝す

太棹社

▼狂言の配色を重んじない文樂座(岡田翠雨)▼太十章句改訂(中野三九)▼歌舞伎座の道明寺(小泉眞吉)▼壽樂會座談會(岡田翠雨)▼フォーラム(坂本猿冠者)▼加賀見山舊錦繪(五)▼太棹俳壇(芳河士選)▼大會と小會・會報▼口繪(聲友會・竹韻會)

▼第拾六號——▼不純なる改名を戒しむ(岡田翠雨)▲太絃主奏樂(中野三九)

▼豊竹呂昇逝く(岡本松濱)▼小助と直助(田村西男)▼黒衣朗讀會に列りて(久保田金僊)▼「なにはの俤」を讀みて(岡田翠雨)▼東都五十義會々長の披露▼大會と小會・淨曲振興會生る・葵氏と加賀見山・正音苦聲・雜報▼口繪(三井眞鳳氏・豊竹八重壽見臺開)

▼第拾七號——▼申上ます(小川虚舟)▼小川先生を引入れる迄(富取壽鹿)▲讀者諸君は同時に我社友である(富取主幹)

▼大阪文樂一座を聴く(小川虚舟)▼時代錯誤の會則を改めよ(岡田翠雨)▼八日の夕・聞いたまゝ(宇崎瑤子)▼義太

▼自分の義太夫を自分で聞け▼潤色焰土藏(石井琴水)▲梵語の國語化(アン・ニマス)▼海外の社友諸君へ・内地の社友諸君へ▼逸話集(芋虫爺)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼太棹俳壇(芳河士選)▼雁のたより(豊澤猿之助・豊澤團四郎)▼十月の運勢(納音生)▼大會と小會(驢

▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)

▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

▼神靈矢口渡(中野三九)▼堀川の話(田

▼會報・消息▼口繪(ありし日の大隈邸のつどゐ・松本公會堂に於ける招友會の人々・東劇に出演の文樂座の人々)▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

▼會報・消息▼口繪(ありし日の大隈邸のつどゐ・松本公會堂に於ける招友會の人々・東劇に出演の文樂座の人々)▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

▼會報・消息▼口繪(ありし日の大隈邸のつどゐ・松本公會堂に於ける招友會の人々・東劇に出演の文樂座の人々)▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

▼會報・消息▼口繪(ありし日の大隈邸のつどゐ・松本公會堂に於ける招友會の人々・東劇に出演の文樂座の人々)▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

▼會報・消息▼口繪(ありし日の大隈邸のつどゐ・松本公會堂に於ける招友會の人々・東劇に出演の文樂座の人々)▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

▼會報・消息▼口繪(ありし日の大隈邸のつどゐ・松本公會堂に於ける招友會の人々・東劇に出演の文樂座の人々)▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

▼會報・消息▼口繪(ありし日の大隈邸のつどゐ・松本公會堂に於ける招友會の人々・東劇に出演の文樂座の人々)▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

▼會報・消息▼口繪(ありし日の大隈邸のつどゐ・松本公會堂に於ける招友會の人々・東劇に出演の文樂座の人々)▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

▼會報・消息▼口繪(ありし日の大隈邸のつどゐ・松本公會堂に於ける招友會の人々・東劇に出演の文樂座の人々)▼第拾八號——▼餘白の力(小川虚舟)▼蛙の戲言(小泉蛙鳴)▼義太神樂(中野三九)▼音女會評判記(芳河士・さく子・虚舟)▼錦粧軒川柳(阪井久良伎)▼逸話集(芋虫爺)▼加賀見山舊錦繪(七)▼本社主催淨曲大會(小島三喜子)▼五十義會採點表▼聲義會評(驢驢)▼質問欄(響阿彌)▼太棹俳壇(芳河士選)▼會報・消息▼口繪(聲義會の人々・三井

謹賀新年

席貸 並木俱樂部

淺草・雷門  
電話淺一二三五番

義太夫席として皆様のお氣に召す俱樂部で御座います。

どちらからも最も便利で、落ついて聴くお方まできつと喜びます。乗物は電車・バス・地下鐵いづれも雷門下車、直ぐ近間でございます。

謹賀新年

熱海新鈴よし

三勝  
外一同

熱海市旭町  
電話熱海三四三〇番

村西男)▼三澤初子の傳▼五十義會の審  
 査に就て(鶴澤綱造)▼本社主催淨曲大  
 會(宇崎瑤子)▼義曲漫談(里聲生)▼  
 加賀見山舊錦繪(八)▼五十義會評(驢  
 胖生)▼義太夫古蹟巡り(豐澤芳太郎・  
 豐澤猿喜知・豐澤團四郎)▼太棹俳壇(芳  
 河土選)▼津賀太夫・猿之助一行より▼  
 大會と小會(驢胖)▼會報・消息▼口繪  
 (五十義會の人々・小林和舟氏見臺披露  
 栗原千鶴氏・鈴木松實氏・岩村一笑氏・  
 寺岡三幸氏・黒川叶氏・神馬里芳氏  
 ▼第廿號——小川虚舟氏追悼號——▼湯  
 原清司君の太十を聴く(絶筆・小川虚舟)  
 ▼小川文雄君を憶ふ(澤田牛麿)▼小川  
 君を惜しむ(長岡外史)▼小川文雄君を  
 惜しむ(巖本善治)▼義太夫は藝術ぢや  
 (杉山茂丸)▼故小川君を偲びて(大河  
 内得一)▼故小川先生(山田活禪)▼不  
 遇な人・惜しい人(副島八十六)▼噫小  
 川虚舟氏(西村達夫)▼小川文雄氏の靈  
 に捧ぐ(大河内琴)▼小川氏を惜しむ(杉  
 山巴仙・中澤巴・安藤どくろ・栗原千鶴  
 竹内たもつ・宮本武藏・三井篁鳳・寺岡

三幸・谷口響阿彌・鈴木松實・湯原清司)  
 ▼小川氏を惜しむ(竹本朝太夫・豐澤松  
 太郎・竹本津賀太夫・豐澤猿之助・豐澤  
 芳太郎)▼小川氏と靈術(豐澤猿三郎)  
 ▼忘れぬ小川先生(富取三久子)▼小  
 川先生(宇崎瑤子)▼小川氏と私(富取  
 芳河土)▼大會と小會(驢胖)▼義太夫  
 古蹟巡り(豐澤芳太郎・豐澤團四郎・豐  
 澤猿喜知)▼兜會の復活▼五十義會慰勞  
 會▼追善義太夫會(三久子)▼弘法様の  
 お灸(豐澤猿三郎)▼聽衆の不心得(紫  
 雲生)▼會報・各地通信・消息▼口繪(同  
 氣俱樂部に於ける小川氏・追善義太夫會・  
 因會祖先祭)

繪絹・色紙短冊の御注文は  
 波間へ……………

波間商店

下谷仲御徒町一ノ一七

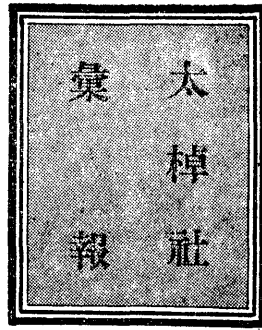
胃腸にミラカチ

謹みて戦捷の新年を  
 御祝ひ申上候

神樂坂へお越しの折は  
 富松葉

勝子





帝都淨曲界に於ける

## 中老會部隊の活躍

### 大日本淨曲競演會生る

帝都淨曲界の重鎮揃え、人氣愈々高まる中老會は、曩に松岡茂里雄、原田越巴、淺田奇聲氏等の入會に相次ぎ、最近は沼井盛鶴、近江清華氏の入會に益々その基礎を堅實ならしめ、今回同會の發企にて大日本淨曲競演會が誕生する事になつた。

既に審査員として大阪の竹本叶太夫、鶴澤叶の兩氏が決定し、番附は等級にす

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。

▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。

▽特種の催はしの外前置きを略します。

—記者—

り、一人二十分語り會費は金拾圓見當にて、剩餘金のある場合は會の積立金とし不足の場合は中老會全員が負擔する事になつてゐる。

審査員は東京に審査の資格のある師匠も少なくないが、地元の審査員では何かと誤錯がないでもないといふ點から、同會は東京とは關係の薄い方面に審査を依頼したもので、なほ又五十義會に對抗するかのやうに言ひふらす向きもあるが、同會は全然さうした意味は毛頭なく、即ち五十義會とは姉妹會の心持ちであると

の事である。  
因に會期は三月下旬、會場は電氣俱樂部の豫定。

## 香伯會

香伯會は十二月廿一日午後四時より電氣俱樂部で左記番組に依り忘年會を催ほした。

壺坂(若好、綾千代)：忠九(千鶴) 引窓(香候) 忠六(紅司) 太十(鐵幹) 寺子屋(掬月) 先代(美地句) 又助(未

成)十種香(紫道)安達(松實)陣屋(清雀)本下(雀)絃(觀西翁)

セントス。

# 女義の定席『東橋亭』で

## 連夜素義の公演

看

規約

板 素義練習所  
飛入勝手次第、晴雨ニ拘ラズ毎日  
無休

開

演 二月一日午後五時より

入場一切無料

會

語リ時間 一高座三十分

廣

飛入者ハ三味線付キニテ同斷

箱

費 金貳圓也

廣

座付三味線ニテ語ラル、場合ハ、  
絃代トシテ金貳圓ヲ申受ク。尙一

入

段語リハ倍額、七分語リハ五割増  
ノ事(此場合糸代モ同斷)諸動具

廣

貸與ノ便アリ

廣

屋 金壹圓ヲ申受ク

廣

右ハ市内荷物配達料ニテ、遠方ハ  
別ニ相談ス。尙床世話ハ練習所持

廣

チニテ無料

廣

告 場内或ハ番組裏面へ宣傳廣

廣

告ノ求メニ應ズ

廣

入 飛入申込者ハナルベク前日

女義といへば東橋亭と昔からゆかりの  
深い雷門の此東橋亭が、新春二月一日か  
ら素義の練習場となつて連夜賑々しく開  
催される事になつた。この發企者は松林  
福笑、小林和舟の兩氏で、これに金田金  
鳳、廣瀬いろは、細川清、高瀬操、上田  
上誠、及川旭、飛石かなめ、高橋宮古、  
若手會その他多數の賛成者が續々と集つ  
てその準備中であるが、何しろ營利を放  
れた出演者本位といふ趣旨は時節柄極め  
て大好評で、出演希望者は押すなゝの  
超満員を豫想されてゐる。趣意書並に規  
約左の通り。

### 趣意書

今般非常時局ニ鑑ミ、素義練習所ヲ淺  
草雷門前通り東橋亭ニ於テ、晴雨ヲ論ゼ

ズ連日無休ヲ以テ午後五時ヨリ十時迄開  
催ト定メ、遠近者男女ヲ問ハズ飛入自由  
ニテ、三味線見臺衣服床世話等ノ使用求  
メニ應ジ、高座出語りノ簡易化ヲ計リ、  
一般聽衆者ヲ一切無料入場ヲ許シ、勸善  
懲惡忠孝義理人情古典歴史風俗ヲ織込ミ  
タル文章ニ音曲ヲ加ヘ、大音聲ヲ發シ、  
表情抑揚ヲ公開、以テ聽衆ニ自然ニ會得  
セシメ練習ヲ廣ク促進シ修養、交際、健  
康ニ善用セラレンコトヲ望ムト同時ニ、  
斯道ノ發展ニ資スベキ目的ヲ以テ設立ス  
幸ニ全國趣味同好者ノ御賛成ヲ得レバ本  
懐ノ至リナリ。

廣

尙二百點ヲ滿點トスル投票箱ヲ場内手  
洗所ニ設備シ、一般聽衆者ノ投票ヲ受ケ  
二十名以上ノ幹事ノ合議ノ上優秀ナル成  
績者ニ對シ賞狀ヲ贈呈シ一層ノ振興ニ資  
飛

ノ午後五時ヨリ十時迄ニ練習所宛  
テ申込ノ事(語り順番ハ幹事ニ一  
任ノ事)

其 他 一般義太夫會ノ貸切ノ求メ  
ニ應ズ。尙稽古希望ノ向キニ對シ  
テハ、適當ナル師匠ヲ紹介ス

幹事ハ義太夫ヲ語ル者貳拾名限リトシ  
金貳拾圓前納拂込ノ事。右金額ハ小林和

昭和十四年一月

### 東橋亭幹事一同

電話淺草二〇二二番

## 人形入義太夫義士祭の夕

十二月十四日夕五時より第一徴兵保険  
の八階講堂で、左記番組に依り義士祭の  
夕を開催、三味線は竹本素女一座、人形  
は池田三國氏の南北座にて、時局柄此意  
義ある催ほしを盛會裡に終演。

忠臣藏三段目門外(勘平、九臯。お輕

素八。伴内、可雪) 四段目(無涯) 五段  
目(定九郎、九臯。與市兵衛、春甫。勘  
平、素八) 六段目(どくろ) 七段目(由  
良之助、どくろ。おかる、無涯。平右衛  
門、春甫。力彌、矢間、可雪。千崎、素  
次。竹森、素國)

## 淨曲無名會

十二月六日午後四時より電氣俱樂部に  
開催。

吉田屋(長平、龜造) 本下(美峰、猿  
之助) 帶屋(どくろ、司好) 太十(國聲

猿三郎) 壺坂(操、道之助、ツレ扇之助)  
追報。只今校正中へ、一月十七日同俱  
樂部にて午後四時より新年義太夫會開催  
の通信に接しましたから左に。

日吉(操、道之助) 辨慶(長平、龜造)  
酒屋(美峰 猿之助) 寺子屋(どくろ、  
司好) 堀川(國聲、猿三郎、ツレ扇之助)  
なほ次回は二月十七日、三月十七日。

## 九臯會

同會は新年義太夫會を一月十日午前十  
一時より三越ホールに於て開催。各自熱  
演好評の中にも、大切阿津滿氏の「堀川」  
で、猿廻しの件で浪六氏が猿を使つてそ  
の妙技に喝采を博した。

寺子屋前(花玉、鶴助) 奥(喜鶴、鶴  
玉) 朝顔(喜城、猿喜知) 新口(柳蝶、  
鶴玉) 吃又(浪六、鶴助) 逆鱗(司朝、  
紋左衛門) 堀川(阿津滿、鶴助、ツレ紋  
三郎)

# 玄素聯合淨曲研究會

十二月十二日午後六時より第四回を廻の「河庄」があつた。第四回番組左の通り。町區公會堂で開催。次いで二十一日午後五時より丸ノ内蠶糸會館七階日本間に於て同會の懇親會を兼ね出演順の相談會を催ほし、終つて豊澤廣助(糸豊竹和歌吉)

十種香(大ゑい、越治) 鰻谷(千晴、團市) 先代(染登、紋教)

## 第六回 清 樂 會

第六回清樂會は同會の忘年會として十二月十七日午後三時半より、本郷春木町志久本俱樂部に開催、何しろ近江清華氏の肝入りとて盛會をつくし、樂屋の賑かなことこれ又稀れな華やかさで、義太夫、清元、哥澤、小唄と數番の後切前で近江氏令嬢君子さんの舞踊「三ツ面」のそのあざやかな演技に滿場大喝采を博した。

橋辨慶(牛若、靜子。辨慶、いく子。)  
 絃智恵子、春子、寛三郎) いざさらば、いつしか(松浦) 新口村(春子) 戀すてふ、うぐひす(智恵子) 石川や、土堤を通るは(龜好) 中將姫(中將姫、智恵子。岩根御前、豊成卿、清華。廣次卿、千賀子。浮舟、靜子。桐の谷、いく子。絃寛三郎) 小唄(秀峰) 湊町(朝正) 三ツ面(君子) 七段目(由良之助、いく子。おかる、靜子。平右衛門、千賀子。絃寛三郎)

## 黒川叶氏 病氣全快祝賀義太夫大會

黒川氏は永々病氣にて帝大で大手術をうけ、一時は頗る重態であつたが、日

に増し経過良好を得て家人の愁眉を開くに至つた。其後向島の自宅で加療靜養を續けられ、此頃は全く恢復されたので、十二月廿三日午後四時より交正俱樂部に於て女天會々員出演のもとにその祝賀義太夫會が賑々しく開催された。(神馬里芳氏は病中缺演)

橋辨慶(勝助、龜造) 新口村(彌聲、扇之助) 湊町(叶、玉勝) 本下(巴雀、岬太夫) 小磯(喜代子、三福) 太十(登盛、条造) 安達(津ぼ美、扇之助) 逆鱗(千賀子、寛三郎) 寺子屋(歸世花、扇之助) 此外叶氏が元氣のよい舞踊があつて目出度終演。

## 互 調 會

互調會の廿四回を同會の忘年會として十二月十九日文化俱樂部で開催。

御祝儀(佳世子) 八陣(みなと) 岸姫(義雀) 吳橋(山生) 土橋(二三樂) 陣屋(乃菊) 絃(良造、佳照、鹿重、蝶子) 大切野崎村(掛合) 久作(蝶子) お光(鹿重) お染(佳照) 久松(佳仙) 下女(佳世子) 絃(良造、ツレ仙照)

# 支那事變 慰安の夕 出征家族

松葉會主催やまと新聞社後援のもとに  
大阪文樂座人形入義太夫會を、十二月廿  
四日午後四時より日本橋俱樂部に開催、  
出征家族慰安として日本橋區役所の應援も  
あり、頗る盛會を極めた。

## 南北座初春公演

南北座の初春公演は、一月廿五日より  
三日間毎夕五時より日本橋俱樂部に決定  
出演者並に人形役割は左の通り。

初日 御祝儀三番叟(人形) 忠六(杣  
太夫、松市郎) 辨慶(都太夫、猿藏) 朝  
顔(浪花太夫、道之助、琴壽美子) 新口  
村(朝見太夫、芳太郎) 太十(彌國太夫  
寛三郎) 人形: おわさ、深雪、操(三  
國) 彌五郎、しのぶ、梅川、初菊(國三  
郎) 郷右衛門、岩代(弦之丞) おかや、  
(冠次郎) 勘平、辨慶、孫右衛門、光秀  
(國五郎) 待從太郎、徳右衛門(清三郎)

太十前(奇聲、廣助) 奥(三玉、廣助)  
瀧(緋紗斗、廣助) 夜叉王(素鳳、廣助)  
壺坂(鈴鳳、廣助、ツレ清友) 辨慶(い  
さを、團六) 志度寺(いろは、團市)

花の井、さつき(國若) 駒澤、忠兵衛(東  
十郎) 八衛門(傳吉) 久吉(榮一) 正清  
(備後) 下女(信吉)

二日目 御祝儀三番叟(人形) 壺坂(朝  
見太夫、芳太郎) 陣屋(彌國太夫、寛三  
郎) 酒屋(都太夫、猿藏) 合邦(杣太夫、  
松市郎) 先代(浪花太夫、道之助) 人  
形: 相模、お園、玉手、政岡(三國) お  
里、藤の方、三勝、淺香姫、千松(國三  
郎) 澤市、軍次、半兵衛、俊徳丸、榮御  
前(弦之丞) 熊谷、合邦(國五郎) おつ  
う、鶴千代(小信) 母(國若) 宗岸、八

汐(清三郎) 母(綱助) 沖ノ井(東十郎)  
三日目 御祝儀三番叟(人形) 日吉、土  
佐子太夫、延左衛門) 白石(都太夫、猿  
藏) 寺子屋前(浪花太夫、道之助) 奥(朝  
見太夫、芳太郎) 沼津前(駒登太夫、扇  
之助) 奥(彌國太夫、寛三郎) 十種香奥庭  
迄(掛合) 八重垣姫(浪花太夫) 勝頼(彌  
國太夫) 濡衣(朝見太夫) 謙信(駒登太  
夫) 白須賀(土佐子太夫) 絃(寛三郎、  
ツレ好造、琴紋三郎) 人形: お政、源  
藏、八重垣姫(三國) 吉晴、玄蕃、孫八  
謙信(弦之丞) 久吉、宗六、千代、重兵  
衛(清三郎) 竹松、しのぶ、戸浪、勝頼  
(國三郎) 五郎助、宮城野、松王、平作  
(國五郎) ばゞ(傳吉) かむろ、若君(小  
信) 御臺(國枝) お米(綱助) 濡衣(東  
十郎) 白須賀(備後) 原(冠次郎)

### 綾 秀 會

同會は銃後慰安義太夫會を十二月十九  
日西ヶ原俱樂部に開催。例に依り滿員を  
呈した。  
辨慶(綾路) 小磯(歌吉) 新口(綾登)

酒屋(鳴門)組打(龍司)油屋(壽瓢)絃(竹本綾秀)

# 大阪文樂座初春興行

大阪文樂座人形淨瑠璃の初春興行は、

出し物も近頃でない精選と言ふべく、太夫三味線人形總出演にて元日を初日に本城四ツ橋の文樂座で華々しく開演した。

忠臣藏道行(鑿太夫、駒太夫)(伊達太夫、竹太夫、松島太夫、相瀨太夫)(新左衛門、清二郎)(吉左、喜代之助、新太郎、友三郎)

同九段目前(駒太夫、清二郎、鑿太夫、新左衛門)奥(大隅太夫、廣助)

娘景清八島日記日向島。中(長尾太夫、友造、友平)切(津太夫、綱造)

安宅關勸進帳。辨慶(相生太夫、織太夫)富樫(相生太夫、織太夫)義經(源太夫)伊勢(長尾太夫)駿河(富太夫)

片岡(さの太夫)常陸坊(播路太夫)梶下(常子太夫、宮太夫)番卒(駒若太夫、相瀨太夫)(道八、團六、喜代之助、清友

一 郎右衛門)

三十三間堂平太郎住家(古靱太夫、重造)

壽柱立萬歳萬歳(文字太夫)才三(織太夫)ツレ(富太夫、常子太夫、隅若太夫)(吉左、團六、鶴太郎、市之助、友十郎、廣二)引ぬき團子賣。杵造(相生太夫)お福(源太夫、さの太夫、駒若太夫)土佐太夫(吉彌)友造、友平(猿二郎、友若)(團伊三、友藏、吉藏)

## 人形配役

戸無瀨、お柳、お福(文五郎)小浪、糸瀧、義經、才三(紋十郎)おりん、縁丸(紋司)お石、母(小兵吉)本藏、富樫(玉藏)力彌(榮三郎)佐治太夫、平太郎(政龜)尼野、常陸坊(門造)伊勢(紋太郎)駿河(玉德)片岡(多三郎)梶下(玉次郎)軍内(文之助)和田四郎、

萬歳(玉幸)藏人(玉市)由良之助、景清、辨慶、杵造(榮三)

朝鮮文藝社主催の戦勝祝賀淨瑠璃大會は、十二月三、四の兩日京城本三俱樂部に開催。

初日酒屋(錦三、梅若)太十(あづま、東廣)日吉(呂竹、竹子)鮎屋(登雀、竹子)合邦(二引、竹子)堀川(扇昇、東廣、ツレ初子)瀧(圓八、梅若)岡崎(登鶴、竹子)

二日目太十(錦三、梅若)組打(吾妻、東廣)先代(かすみ、東廣)寺子屋(キング、梅若)又助(義雀、猿糸)鮎屋(貴勢、東廣)忠四(古雀、猿糸)七段目(掛合)由良之助(古雀)力彌(あづま)おかる(貴勢)平右衛門(圓八)絃(錦三)

戦勝祝賀

淨瑠璃大會

初日酒屋(錦三、梅若)太十(あづま、東廣)日吉(呂竹、竹子)鮎屋(登雀、竹子)合邦(二引、竹子)堀川(扇昇、東廣、ツレ初子)瀧(圓八、梅若)岡崎(登鶴、竹子)

二日目太十(錦三、梅若)組打(吾妻、東廣)先代(かすみ、東廣)寺子屋(キング、梅若)又助(義雀、猿糸)鮎屋(貴勢、東廣)忠四(古雀、猿糸)七段目(掛合)由良之助(古雀)力彌(あづま)おかる(貴勢)平右衛門(圓八)絃(錦三)

戦勝祝賀

淨瑠璃大會



## 玉井松樂氏

よ」など、今になりますと、その頃から不歸の客となる兆しが現はれてゐたかのやうに思はれます。白地の方がいゝ……；噫、何んといふ悲しい口占となつたのでありませう。

十二月廿五日午後十一時卅五分永眠。

淨曲界は元より、劇界、角界其他あらゆる方面に交誼の擴かつた氏は、多數の花輪に惜別を止めて、廿八日午後二時から三時迄歌舞伎座前の辨松本店に於て、盛大な告別式が行はれました。

(カットは故玉井松樂氏)

玉井松樂氏の永眠は夢のやうでありませう。ときはきと凡てを判断され、あの元氣のよい松樂さん、厭味のない松樂さんあの熱のある高座振りは、髣髴として眼に見えます。

敵がないといふのは松樂氏の事でありませう。兎角好き嫌ひや、あれこれと五月蠅い斯界に、氏は全く嫌はれもせず、敵もなく、そして義太夫界に盡された功は甚大なものであります。

催ほしに出演を頼んでも「おれは口を語るよ、口で澤山だ」と、抽籤などには依らずに、何時も早い處を語られたものでした。脱俗した愛義家とでも申すのでせうか。

私の畫會に「君の畫なら書かずに白地の方がいゝよ」と笑ひ乍ら二口申込まれたのは、一昨年慶應病院で手術される直前の事でありましたが「白地の方がいゝ

## 近江とめ子様の急逝

近江清華氏の令姉とめ子様は、舊臘九日腦溢血でそのまゝ重態に陥られ、十九日午前二時五十分遂に逝去なされました。各席の義太夫會で清華氏御出演の際には、必ず奥様と睦じく前へまはつて、終始お聴きになつておいでの處を、皆様もお見かけの事と存じます。

享年五十四、誠にお悼はしい限りで御座います。廿二日正午より一時迄麴町の近江氏邸に於て、兜町を始め各方面から贈られた生花花輪は門の内外を埋づめ佛式に依り盛大な告別式が行はれました。茲に謹んで御冥福を祈り追悼の意を表します。

——芳河士——

本誌後援名譽會員

(イロハ順)

廣瀬	岡崎	吉川	平野	阿部	北島	中澤	安藤	吉田	小川	安藤	保々
いろは氏	岡六氏	浪補氏	ろ昇氏	一氏	北斗氏	巴氏	どくろ氏	登盛氏	都山氏	都昇氏	長平氏
栗原	神馬	鈴木	小林	本多	飛石	加藤	高橋	西田	大用	田口	疋田
千鶴氏	里芳氏	和樂氏	和舟氏	可笑氏	かなめ氏	兜氏	可遊氏	可松氏	大嘉津氏	辰壽氏	大龍氏
井上	小林	坂倉	浮谷	小埜	宮本	萩原	乃村	中野	山下	國井	鈴木
巽氏	太二氏	團壽氏	祖樂氏	長とろ氏	武藏氏	うつぼ氏	乃菊氏	吳羽氏	彌生氏	丸都氏	福笑氏
水戸部	原田	河野	田中	大築	松本	及川	柳	寺岡	木村	齋藤	平井
壽氏	越巴氏	國聲氏	湖月氏	葵氏	朝章氏	旭氏	有明氏	三幸氏	さかえ氏	山生氏	榮氏
細川											清氏



岡田	野口	横井	吉田	高瀬	岩田	吉良	岩木	猪谷	川奈部	歸山	淺田	錦	井田	金田
源氏	みなと氏	三由氏	美地句氏	操氏	末成氏	蟻若氏	義雀氏	銀水氏	銀司氏	歸世花氏	奇聲氏	錦松氏	菊泉氏	金鳳氏

近江	白井	松岡	桑原	高品	武笠	濱口	田口	山田	平井	菊池	鈴木	吉田	池田	北村
清華氏	清華氏	茂里雄氏	美峰氏	一重氏	宏亮氏	秋華氏	司重氏	壽瓢氏	壽樂氏	秋月氏	松寶氏	三芳氏	三國氏	三葵氏

湯原	沼井	時田	(地方之部)		米國	同武	同杉山	同兼廣	同西本	同	同	同	同	同
清司氏	盛鶴氏	靜史氏	野一	昇氏	榮玉氏	陶岳氏	廣玉氏	西紫氏	杉鳳氏	下	田島	集樂氏	十八公氏	保良
			鈴鳳氏											

名譽會員

保良鈴鳳氏

本誌後援名與會員を御快諾  
賜り難有奉深謝候

太 棹 社

# 當座帳

▽國井やまと氏 元丸都氏は舊名「やまと」と改稱。

▽神馬里芳氏 盲腸炎にて十二月八日深川病院に入院、直ちに手術せられ経過良好目下自宅にて療養中。

▽的野關路氏 永々病氣にて静養中。

▽野崎龜鶴氏 蒲田區東蒲田四丁目十五番地と町名改稱。

▽湯原清司氏 電話高輪〇九一六番増設。

▽錦 錦 松氏 妻女は深川白河町一ノ六に天ぶら小料理『二草』を開業。

▽豊竹巖太夫 電話小石川五八〇〇番に變更。

▽豊竹駒登太夫 芝區高輪南町三〇番地に轉居。

## 編輯後記

★皇威八紘に輝く聖戰第三年の新春を迎へました。武運長久を祈ると共に皆々様の御健勝を祝福申上ます。

★弊誌も皆様の御後援の下に目出度第百號に達し、本月は百壹號の第一歩を踏み出しました。一は萬物の始り、これから

又改めて精氣漲る『太棹』を皆様へお送り申上げるやう努力致します、何卒倍舊の御愛顧を偏にお願ひ申上ます。

★本誌の百號をお祝ひ下され句佛上人を始め、小室翠雲、中村不折兩畫伯の御染筆 忝ふしたことはうれしき限りであります。なほ御祝詞或は御鞭韃の御手紙を賜りました皆様に厚く御禮申上ます。

★新年號はいつも早く届く齋藤氏の原稿が思ひの外遅れ、金丸丸氏のラヂオ漫評は老體風邪の爲め校正が終る迄とうとう未着、新年號にはと約束のあつた安藤氏は又ぞろ多忙とあつて(或は飲み過ぎ)次號まではしといふ有様で、編輯は随分骨が折れましたが、坂本氏の笑ひの腹を始め、川端氏の名人豊澤松太郎師を偲ぶ、豊島丘山人の戯曲の人名、宮澤氏の院本の話などに、東橋亭が素義の道場となつたり中老會の活躍等其他彙報欄が急に賑つて新年號としての頁も豫定に達して安心致しました。

★舊臘は名人豊澤松太郎師に次いで鶴澤勝鳳師逝き、近江清華氏の御令姉様の急逝、これに又次いで玉井松樂氏の永眠、何んといふあはたゞしい師走でありましたでせう。本年は何卒計書の少なきやう斯界の多幸を念願致す次第であります。

芳河士

定		價		廣告		料	
一部	金三十錢	六月分	金一圓八十錢	普通	一頁	別一頁	金貳拾圓
郵税	三錢	郵税	共	金貳拾圓	金貳拾圓	金貳拾圓	金貳拾圓
郵税	共	郵税	共	金貳拾圓	金貳拾圓	金貳拾圓	金貳拾圓

第百一號 (毎月一回廿五日發行)

昭和十四年一月十七日印刷納本  
昭和十四年一月二十日發行

編輯兼 發行人 富取 壽鹿  
東京市牛込區早稻田町五八  
印刷人 栗原 榮松  
東京市牛込區早稻田町五八  
印刷所 栗原印刷所  
電話牛込二四五二番

發行所 太棹社  
東京市小石川區音羽二丁目二四  
振替東京三一七八五番

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます  
▼誌代は總て前金御拂込の事  
▼なる可く振替に御送金の事  
▼郵券代用は一割増但三錢切手  
の事

年 新 賀 謹

---

ト ー パ ア 級 高  
莊 綠



○五二ノ二町淵岩區子王  
裏局便郵・車下口東驛羽赤

番一八一六谷下話電は又莊弊接直はみ込申御  
いさ下用利御と(田坂)

祝 戰 捷 之 新 年

謹 告

安普請ですが各室共離れで

風呂附きに改造いたしました

安直と親切は昔からの儘

但し上戸のお客様には不向き

御料理旅館

大井海岸  
下戸庵

美 どり 利

電話大森 二四四八番  
二九二八番

(省)京濱電車 大森驛下車二丁  
大森海岸下車一丁

昭和十四年一月十七日印刷  
昭和十四年一月二十日發行

(毎月一回廿五日發行)

太

棹

(第百一號)

定

價

金參拾錢